

## 「神」としての声をめぐる実践

―石垣島川平におけるマユンガナシの成員と「神口」―

澤井 真代

### 一 はじめに

琉球列島の南西端に位置する八重山諸島の石垣島川平集落（かづら）では、年の変わり目の儀礼において、生身の人間が成り代わる来訪神「マユンガナシ（真世加那志、*manjaganashi*）」が現われる。マユンガナシは各戸訪問し、新年を予祝する唱え言「カンフツ（神口、*kangpusti*）」を唱える。マユンガナシのカンフツは従来（かづら）の先行研究において、神による一人称の律文に文学の発生を見る「文学発生論」の観点から、「文学の原形」<sup>①</sup>「外間 一九九五―三〇一」、「文学の発生点」<sup>②</sup>「谷川 一九九一―三五〇」と位置づけられてきた。そこでは主にカンフツのテキストの分析を通して、「文学発生論」におけるカンフツの始原性が指摘されてきたのだが、一方で、今日までの川平社会でカンフツが担われてきた実態については追究されてこなかった。

マユンガナシのカンフツは、毎年の儀礼で声として発せら

れ、人々に受け止められることによって、儀礼の場を構成する要素となる。筆者はこの点を重視し、カンフツの実態を、川平における担い手の知識と実践に即して明らかにすることを指す。その一環としてすでに、マユンガナシを迎え、カンフツを聞く側の人々に着目した考察を行ない、聞き手達が各々の立場に応じて身につけているカンフツについての知識をもつて、儀礼実践に臨んでいることを明らかにした「澤井 二〇〇五、二〇〇八」。

これに続き本稿では、マユンガナシとしてカンフツを発する側の成員に着目する。成員達がカンフツを習得する過程を検討し、マユンガナシのカンフツが、これを自らの声で唱える義務を負う人にとってどのようなことばなのか、考察する。

具体的には、カンフツの唱え方としての声についての、高低や節回しに関する規範、さらに、マユンガナシ儀礼の一晚の間、成員を制約する声についての規範―カンフツを唱えるほかに「もの言わぬ」こと―に着目する。先行研究には、儀礼の過程

や由来、またカンフツの内容を詳細に検討し、マユンガナシとは年の変わり目に他界から訪れ、豊穰をもたらす神であると指摘するものが数多い<sup>2)</sup>。これに対し本稿では、儀礼を成立させるための「声」のあり方に着目することにより、マユンガナシの象徴的な存在意義ではなく、人々の五感に直結する実践のレベルで、この神が人々にとってどのような神であるか、明らかにする。

なお本稿は、筆者が二〇〇〇年三月に開始した、川平の年間儀礼における歌・唱え言・発話に着目した調査のうち、とくに二〇〇〇、二〇〇一、二〇〇三、二〇〇六、二〇〇七、二〇〇九年にマユンガナシの儀礼の時期に行なった調査に基づく。

## 二 マユンガナシの成員の状況

マユンガナシの儀礼は、かつては石垣島の北部から西部の諸集落で行なわれていたが(牧野 一九八七 五三―五)、現在は川平集落のみで続けられている。年の変わり目の儀礼「節祭(シチ、[*ŋi*])」は八重山の諸集落で行なわれるが、川平では節祭の初日が戊戌の日に当てられ、この日にマユンガナシ儀礼が行なわれる。

マユンガナシ儀礼は、川平の「上の村」と「下の村」で別々に行なわれ、マユンガナシの成員も上・下村それぞれに、成員の長としての「フームトゥ(大元、*fu:mu:tu*)」のもとに集めら

れている。成員は、マユンガナシ儀礼の由来伝承に基づき、戊年生まれの男性が望ましいとされるが、近年は成り手の不足により、戊年生まれではない成員が多い。しかしフームトゥに限っては、必ず戊年生まれでなくてはならないとされている。

儀礼当日は、カンフツのすべてあるいは大部分を唱えるムトゥ(元、*mu:tu*)と、ムトゥにつき従い、場合によってはカンフツの冒頭部を唱えるトゥム(伴、*tu:mu*)の二人一組で各戸を訪問する。カンフツをすべて覚えてムトゥをつとめることを、「ムトゥを取る」と言う<sup>3)</sup>。ムトゥが年輩でトゥムが若輩という場合もあるが、カンフツをすべて覚えた若者がムトゥを取り、先輩がトゥムとして若いムトゥを見守るという場合もある。

成員の人数は、二〇〇〇・二〇〇一年は上・下村とも四組八人、二〇〇六・二〇〇七・二〇〇九年の調査時は、上の村は四組八人、下の村は三組六人だった。かつては、十六歳に達した男性は誰もがマユンガナシになることを希望した<sup>4)</sup>というが、第二次世界大戦後、集落外への転出者の増加や、農業以外の仕事に就く人の増加、新興宗教の流入などを背景に、成員の数が減少し続け、今日に至っている。

同様の理由により、マユンガナシを迎える家の数も減少が続けている。かつてはほとんどすべての家がマユンガナシを迎えたというが、二〇〇九年八月末現在の川平の人口三二二世帯六三三人に対し、同年十月の儀礼でマユンガナシを迎えた家は、上の村は一一軒、下の村は一二軒だった。下の村は二〇〇八年

の一五軒から三軒が減ったのだが、その背景には具体的には、マユンガナシに應對する当主が高齢になったこと、しかし迎える技術に長けた後継者がいないことが、主な理由としてある。

このように、儀礼の規模は今日まで縮小を続けているが、成員の中には、本儀礼の存続と継承への意志をもってカンフツの習得に取り組み、二十〜四十代の若い世代の男性も多い<sup>5)</sup>。次節では、フームトウら年輩者が、そうした若い成員に対して行なうカンフツに関する指導の内容を挙げながら、カンフツが成員達によってどのように捉えられ、人の声によることばとしてどのように実現されることが目指されているのか検討する。

### 三 カンフツの習得—カンフツのブリカタ

#### ①カンフツを「思い出す」時期

「カンフツは長いので、覚えるのが大変」とは、マユンガナシの現役の成員・経験者、また成員の家族も含め、多くの人が言うことである。しかし、だからといってカンフツの習得に一年中励んでよいというわけではない。まず、旧暦の七月は仏事を行なう月とされ、カンフツを口にしてはならないとされる。成員達は、旧の七月が明ける頃から、カンフツのことが「気になつてくる」。マユンガナシ儀礼の一週間〜十日前になると、フームトウの家に集まって本格的な練習を行なう。

節祭の一週間前から、毎日ムトゥヤー（フームトウの家）で練習。（マユンガナシ儀礼の）翌日は、もう忘れてる。（カンフツを）しゃべれと言われても、しゃべれない。また来年のこの時期になつてくると、ズーッと自分の頭の中に（歌詞が）出入りする。二日で全部思い出す。

（二〇〇九年十月、一九五〇〜六〇年代生の現役の成員）

ここで言われているように成員は、毎年マユンガナシ儀礼が終わるとカンフツの習得からいったん離れる。その後半年以上経って、儀礼が近付くと、集中的な練習を開始する。川平の昔ながらの方言話者であれば、こうした習得の周期を三年ほど繰り返せば、カンフツをすべて覚えたという。一方、昔ながらの方言を聞くことはできるが話すことはできないと言われる、およそ一九五〇年生以降の世代になると、個人差もあるが、カンフツの習得には六〜七年かかるという（二〇〇九年十月、一九五〇〜六〇年代生の現役の成員に聞く）。

それでは、一年のうちの限られた期間に行なわれるカンフツの習得は、どのように進められていくのか、次にフームトウの家における練習の経過を見ていく。

#### ②フームトウの家における練習

儀礼当日の一週間〜十日前に始まる、成員達が集まって行なう練習は、必ずフームトウの家の「一番座」で行なわれなければ

ばならないとされる。一番座とは、その家の神がまつられる「ザートツク（座床、*daijuku*）」という、床の間のような空間をそなえた部屋で、客間として使われ、節祭の儀礼で訪れたマユンガナシも、多くの場合にこの一番座で迎えられる。

成員達は、一番座に置かれたちやぶ台を囲んで、フームトゥを上座にして座り、カンフツを練習する。ちやぶ台の上には、皿に盛られた塩が置かれている。唱え合わせの間、成員達は時々、塩を手指でとって口に入れる。塩をなめることによって、「よくタンが出た声」、すなわちカンフツにふさわしいとされる、低くてよく通る声が出やすくなる。

ちやぶ台の上には、カンフツのテキストがいくつか広げられる。成員たちは個々にテキストを作成しているが、その元となるカンフツの台帳は、代々のフームトゥが木箱に入れて一番座に保管している。練習の間、台帳は机の上に広げられ、成員達は随時カンフツの確認をする。成員達はまた、この台帳を書き写した自分のノートを、自分の座る前に広げてそれに時々目を走らせながら練習する場合もある。

各々のノートは、個人でカンフツを練習する時にも、文言を覚える助けとなる。このように文言は、各々でノートを利用するなどして習得することができる一方で、カンフツの節回しは、一人では練習しないほうがいいと言われる。

自分一人ではブリカタは練習しないほうがいいな。（一人の時

は）ただ（歌詞を）暗記して、歌詞だけ言うて、ならつて…

（二〇〇九年十月、フームトゥからトゥムへの説明）

「ブリカタ（折り方、*burikata*）」とは、節回しである。ブリカタの伝授に関しては、今日まで、文言を一人で覚える時のノートのような、個人の練習時に利用し得る伝承媒体が無い。成員同士で対面して、必ず先輩の口から習うべきとされるそのブリカタは、成員達の頭の中のみにあるのである。

### ③練習の一場面―区切りながら覚える

カンフツの文言には、複数の章を通じて共通する定型句があるほか、やはり複数の章に散らばる、似ているが完全に同じではない文句もある。長いだけでなく、油断すると間違いやすい詞章構成であるという点から、カンフツは難しいとされる。

同様にブリカタも、全章を通じた共通性も確かにあるが、章ごとに微妙に異なる点も多い。節回しを一形式、あるいは数形式覚えたらそれがすべてに適用できるというわけではなく、最初から最後まで旋律の微妙な差異に注意しながら、唱え分けなければならぬ。

こうした点に難しさをもつカンフツの習得は、フームトゥの家での練習においては、カンフツを区切りながら唱えては指導を受けることが、繰り返されるかたちで進められる。二〇〇九年十月の調査から、下の村のフームトゥの家におる、カンフ

ツの習得途上にある一人のトゥムが指導を受ける様子を見てみる。

内容		章の名前
(田原)	果報の年、新しい年、	マユンガナシが神の国から果報を携えて川平にやってくるが述べられる
麦・粟・稲・黍・赤豆・諸	六種の作物それぞれについて、整地・収穫の農作業の手順と、作業段階ごとの成功が述べられ、その結果の豊作が祈念される	かつて川平の人々が耕していた、石垣島北西海岸沿いの平久保半島から崎枝半島に至る田地の名前が順に挙げられ、それぞれの田にマユンガナシが果報を撒いてきたことが述べられる
果報の年、新しい年	訪問先の家の当主と妻の健康と長寿が祈念される	
子孫繁昌	訪問先の家の子孫繁栄が祈念される	
牛馬繁昌	訪問先の家の家畜の子沢山が祈念される	
貢布	人頭税時代（一六三七〜一九〇三年）に琉球王府への貢納品の一つだった布について、それが上出来に織りあがるように祈念される	

このトゥムの目下の目標は、カンフツの冒頭の「果報の年」から、「田原」「麦」「粟」までを完全に習得することであり、トゥムは一人で、またフォームトゥと声を合わせて、これらの箇所を繰り返し練習する。稲以降は、他のムトゥ達に唱和するかたちで練習する。

同トゥムは、この年は儀礼の当日も粟までを唱え、稲からはムトゥと交代した。稲の章は、カンフツの習得における一つの

山であり、一番難しいとされる。

一番難しいのはもう、キラマイシヌグ（稲）。これだけ、一番難しいからよ。そのあとキン（黍）、ハカマミ（赤豆）、ハツコン（諸）、この四つだけ覚えたら、残りは短いから。（粟の）次が一番難しいところさ。もう来年。

（二〇〇九年十月、下の村のフォームトゥからトゥムへの談話）

キラマイシヌグ、すなわち稲の章は、稲の生長と農作業の手順を描写する節が、他の章よりも数多く入り、独特の儀礼的表現が次々に展開していく長い章である。このキラマイシヌグを唱えることができるか否かが、カンフツへの習熟の一つの目安となつているのである。

稲よりも前の章においては、粟の章が難しい。麦の章では麦の作り方として、整地、種まき、結実の過程が描写される一方で、粟の章では、結実の前に草取りの描写が加わるのである<sup>6)</sup>。このように、粟がより長く、麦が短い章であることについて、フォームトゥは、「麦にはウルズンもない、フサトゥリもない」ので、すぐに唱え終わるのだと説明する。「ウルズン」「フサトゥリ」とは、次の二節を指す。

「[1] フサトゥリポーレ ニーバギポーレヌナリタビミシヨールーバ」草取り、根分けの時期になりましたら（草取りをし

てくださいと続く」〔川平村の歴史編纂委員会編 一九七六  
一二六頁〕

〔2〕ウルズンヌーユーフカークーユースナリタビミシヨ  
ラーバフープーンデーダリブーンデーシヨ  
ビミシヨリートリー「若夏の時期になりましたら、大  
い穂が出て、垂れ穂が出てまいりますので」〔川平村の歴史  
編纂委員会編 一九七六 一二五〜六頁〕

「フサトゥリ」と「ウルズン」の二節がある分、麦よりも難  
しい粟の章を完全に覚えることが、先のトゥムにとつて目下、  
一番の課題である。このトゥムに対してフームトゥは、粟の章  
を「フサトゥリ」の前と後に分けて繰り返し練習させ、とくに、  
「フサトゥリ」以降を何度も繰り返し返させた。

以上のようにカンフツは、全体として見ると稲の章の以前と  
以後が大きな分かれ目であり、稲の章以前では粟の章が習得の  
山場で、粟の章では「フサトゥリ」の節が区切り目になってい  
るといふように、大小の区切りが、カンフツへの習熟者には認  
識されており、この区切りに沿って、ブリカタの指導が進めら  
れていく。では次に、ブリカタの指導の一例を見てみる。

#### ④ブリカタの一例

先にもふれたが、一部の定型句を除いて、カンフツの細部ま

で通じるようなブリカタの規則性というものはない。たとえば  
同じ単語であっても、章が違えばブリカタも異なる場合も多い。  
そうしたブリカタは、下の村ではフームトゥによって、習得中  
のトゥムが唱えた端から間違えた箇所を指摘して直していくと  
いうかたちで、教授されていく。この時、ほとんどの場合はフー  
ムトゥが「正しい」ブリカタを言って聞かせるのみだが、次の  
例に関しては、文言の意味と関わらせて説明が施される。

「フープー」は、「大きなプー」という意味をこめて。大きく  
見せるように、(声を)下げる。

(二〇〇九年十月、下の村のフームトゥからトゥムに向けて  
の説明)

この指導は、先に掲げた粟の節のうちの、「2」の中の文句、  
「フープー」ついてなされたものである。粟だけでなく、麦の  
章にも「フープー」は出てくるのだが、麦で出てくるときには  
とくにこの指導はされず、粟の中で「フープー」を唱える時に  
いつも、「大きな」「大きい」という意味をこめて、「フー」の  
声を下げるのだという指導がなされていた。

このように、細部において少しずつ異なるブリカタを、成員  
達は、先輩と対面して教授を受けることによって、身につけて  
いくのである。

#### 四 カンフツと音感

前節で見たカンフツの練習の場では、カンフツの「ブリカタ」すなわち節回しに関する指導が、ムトゥからトゥムへの指導の大部分を占める。先輩との対面でのみ、教授されるブリカタは、先にも述べたように、全章を通じて共通性とともに、章ごとの微妙な差異がある点で、簡単に習得できないものとなっている。こうしたブリカタを有するカンフツの習得に向く人とは、音感の良い人であると、人々は言う。

川平ではしばしば「歌がうまい人はカンフツも上手だ」と言われる。反対に、「自分は音痴なのでカンフツは苦手だ」ということもよく言われる。前節で見た練習の場でも、参加していたトゥムの一人について、音感がとても良くカンフツのみこみが速いということが何度も言及されていた。

「トゥムの一人」は、キラマイシスグは今年はまだ（唱えられない）。でもブリカタは上手だよ。人が言ってるの聞いたら逃がさないさね。頭におさめて、そして言えっていったらすぐ言うからよ。言うのは上等に言うさ。めずらしいな、一回（フームトゥが、カンフツを）言ったら、みんなのみこんでるからよ。歌詞は分かんなくても音感があるから、その音に乗してやる（唱える）の上手よ。「そのトゥム」のお父

さんはお店でサンシンを弾く人で、お兄さんは笛の名手だから、血筋というのはめずらしいね！。

（二〇〇九年十月、下の村のフームトゥから成員への談話）

このように、カンフツを習得中の一人のトゥムについて、血筋も持ち出されて、音楽の素質がありカンフツのみこみが速いということが言われている。このトゥムについて下の村のフームトゥはしばしば、五十年間フームトゥをつとめてきたが、このようにブリカタを目の前ですぐに覚えてその場で唱えてみせる人は初めてだと、驚きながら話していた。ここで、カンフツの習得のうえで、重要視される音楽的要素は、実践の場においては、カンフツに特徴的にそなわるものであるという以上に、次のようにカンフツの適切な実現をたすける側面がある。

すなわち、先の談話で「その音に乗してやる（唱える）の上手よ」と言われていたが、カンフツを唱える時、音に乗せられるようにしてカンフツの一節が出てくるというような、旋律が次の一節を呼び起こす側面があるようなのである。

（儀礼当日の本番で）自分のブリカタが変になっておいたらよ、次のが起こせないさ。流れがちがってくるからよ。まちがったなーと思ったら、すぐその前からまた起こしていけば（よい）。たーだ考えておるのではなく、自然と出てくるから。あんだけ練習したんだから。

(二〇〇九年十月、下の村のフームトゥウから成員への説明)

ブリカタを間違うと次の歌詞が出てこなくなるが、歌詞をただ思い出そうとするのではなく、少し前から正しいブリカタでやり直せば、「自然と」次の歌詞が出てくると、フームトゥウは説明している。先に述べたように、カンフツのブリカタは、規則的な繰り返しではなく、全体を通じて差異に富み、それゆえその習得には困難が伴う。しかしその差異をふまえてブリカタを習得してしまえば、それは、やはり単調な繰り返しではない、全体においてその箇所に固有の文言の流れを、記憶のうえに呼び起こす有力な手がかりとなる。

以上では、成員がカンフツを唱える声をめぐり身につける事柄について見てきた。次に、成員の、一晚の儀礼を通しての神としてのふるまいにおいて重視されている、声の規範について、二〇〇九年十月の儀礼前日の打合せの場から、見ていく。

## 五 「神はもの言わない」

儀礼の前日には、上の村と下の村のそれぞれで、全成員がフームトゥウの家に集まってカンフツを唱え合わせる。この唱え合わせについて、成員達は「カンフツ」を「ツラス」と言う。この場では全員で、カンフツの全章を、本番と同様に「ンシー」という発声を入れながら、最初から最後まで通して唱える。

カンフツの唱え合わせの後は、翌日に向けた具体的な打ち合わせが行なわれる。トゥムとムトゥウの組み合わせと、各組の訪問順の決定、また、儀礼の最後に歌う道歌の練習などが行なわれる。そうした打ち合わせの合間に、神装のための持ち物の確認、また訪問先の家で饗応される時の、神としての仕草や作法の確認がなされる。

カンフツの唱え合わせと、その他の事項の打ち合わせが終わると、その場を閉めるにあたって、フームトゥウが川平の昔ながらの方言をまじえて、成員達に明日の「心がけ」を述べ、成員達は正座してこれを聞く。練習や打ち合わせの時間を通じて、フームトゥウは若い成員達を前に大部分の会話を標準語で行なうが、この締めくくりにことは川平方言が主である。

ケーラネーラ マイダン ニーファイユー マヤーヨーン  
ハツツアーヨースコト ユーナリ ダチュケンヤ ココワ  
ヒトツ ココロガケオ カンヌマイヌ ゴミヨードイニ タ  
チテン ココロガケシオーリ マタ トウヌウチュヌメー  
キースカンバ ヒタストラ ムヌイワンヨーンニ カンヌマイヌ  
ダイリ ククルユ ヒトツ ヒキシメ オーリ ハツツア  
ヌユース マインガナシウヌ ゴミヨードイ リツパニ タ  
チ トーテデイ ウモリンユ [ke:ra:ne:ra ma:dan ni:ɕai:u:  
ma:ja:jo:n hatsa:jo:nuko:to ju:nari datsike:ŋja kokowa  
ɕi:otsu kokorogakeo kannumainu gomjo:dani tatɕiten



kokorogakeljo:ri mata tunuutisunume: ki:nukamba citasura  
munuiwajjo:ni kannumainu dairi kukuruju cītotsu cikijime  
ʔo:ri hatsanuju:nu mainganasinu gomjo:dai rippani tafji  
to:tedi ʔumoriju」〔皆様方、どうもありがとうございます。  
マヤーヨー（マウンガナシ儀礼の夜のこと）の、明日の夜の  
ことを言いますので、ひとつ、心がけを。神の前（神さま）  
の御名代に立つ心がけをなさいますように。また、殿内（訪  
問先の家のこと）の前でも気を抜かないで、ひたすら、もの  
言わないように、神の前の代理として、心をひとつ、引き締  
めなされて、明日の夜の、マウンガナシの御名代を、立派に  
お立ちになってくださいと思います〕

（二〇〇九年十月、フームトゥウから成員たちへ向けての訓示）  
ここでは、神の名代として、心を引き締めて、ひたすら「も  
の言わないように」ということが、フームトゥウから成員達へ、  
儀礼前日の集まりの最後に、あらたまった言葉遣いによって、  
注意されている。神の名代として「もの言わない」ということ  
について、フームトゥウは次のように話す。

（マウンガナシになっている間は）二人、トゥムとこうして  
歩いても、なかなか話さないよ。もう、次のおうち、次のお  
うちはどこのこと、皆あたまに入っているもんだから、もう  
その一軒終わったら、もう、すぐ次のおうち（に向かう）。トゥ

ムだろうがムトゥだろうが、早い人がどんどん先を歩く。  
もしも、（若いトゥムの）友達があつて（来て）、なんかん  
や言われても、ぜったい、もの言うことできないよ、棒でた  
たいて行かしてもいいからと、一応話してあります。

（二〇〇九年十月、下の村のフームトゥウ）  
マウンガナシ儀礼の夜は、成員達は、仲間同士だけになつて  
も話してはならず、無言のまま儀礼過程を進めることとされる。  
若い成員に同世代の友人が寄ってくるといった、想定外のこと  
が起こったとしても、決してしゃべってはならないと注意され  
ている。

このように、マウンガナシとしてのふるまいのなかでも「も  
の言わない」ということは、成員達の間で重んじられているが、  
成員以外の人々も、マウンガナシを「もの言わない」存在と捉  
えることを、筆者は何回か聞いている。たとえば、石垣島内の  
他集落から川平に嫁入りした一人の女性は、次のように話す。

昔は、マウンガナシがこわかった。ここに来たばかりの頃は。  
（マウンガナシは）蓑と笠を着けて、歩き方もザッザッザッ  
として。ものも言わんし。

（二〇〇九年十月、一九四〇年代生の女性）  
成員達は神の名代となるうえででの心得として、「もの言わな

い」ことに気を付けるのだが、成員以外の人々も、マユンガナシをふつうの人間と異なる存在と捉える根拠を、マユンガナシが「もの言わない」ことに見出していることが分かる。

## 六 実践の絡み合い

前節で見たように、マユンガナシの成員達はカンフツを唱える以外には、神として「もの言わない」ことを心がける。もつとも、マユンガナシは相槌などのために、しばしば「ンンー」という声を発する。すなわち「もの言わない」とは、マユンガナシが神として、人間らしいことばを話さないということである。

こうしたマユンガナシを、各家において迎え、饗応する役割を果たすのは、各家の当主である。当主は、「もの言わない」マユンガナシの前に、酒食をすすめ、礼を言い、翌年の来訪をたのみ、次の家への来訪を促すという一連の儀礼過程を進行させる役目を負うこと、この時当主は、川平方言で敬語を多用する丁寧な言葉遣いで、かつ、カンフツを多分に引用しながら、話しかけるべきとされていることを、筆者は既に指摘している〔澤井二〇〇五、二〇〇七など〕。ここでは、既発表後の調査から、カンフツの引用が顕著な、当主から神への発話の事例を次に掲げる。

マインガナシウヌマイヒサレー    マイネン    アリトロー  
ル    シチュウヌインヌヨーヤ    ウイヌシウマ    カンスシウ

マール    フーユー    マーユーバ    フチウポール    マチウポール  
ルシ    オーリトローリ    マイダン    シウデイガフユー  
ウモリルドウグンドウヤルユ    マインガナシウヌマイヒサ  
レー    マインガナシウヌマイヌ    カザリトローツタヨニー  
パイカジュヌシーバ    ニシアズラ    マクラシ    ニシカジュ  
シーバ    バイアズラマクラシ    シユームヌ    ツクラバン  
ノリーユーユ    サズケシウミトリーデリ    ファーマー    ナ  
リクীবアン    アデイフキ    コーデイキヌシウコ    ツーサア  
ラスミントリーデリ    マタ    フスウマ    ヘーナリクীবアン  
イバミチウニオーバ    シウダマヌ    ユンナールン    シウ  
コ    マリバンジョーン    アラスミントーテデイ    ウモリル  
ンドウンドウヤルユ    マインガナシウヌマイヒサレー  
「マ  
ユンガナシ様、毎年あります、節祭の戌の日の夜に、上の島、  
神の島から、富世、真世を打ち放り、播き放りしていらっ  
しゃいまして、大変な光栄に存じております、マユンガナ  
シ様。マユンガナシ様のおっしゃったように、南風が吹け  
ば北の畦を枕にし、北風が吹けば南の畦を枕にし（という  
ように）、諸作物を作りますなら、稔りの世を授けください。  
子孫が生まれたら、アデイフ木、コーデイ木のように強く  
ありますように。また、牛馬が生まれましたら、狭い道に出  
ましたら数珠玉が弓なりに曲がるように生れ繁昌であります  
すようにと思います、マユンガナシ様」

(二〇〇九年十月、一九四〇年代生の当主からマユンガナシへ

## の発話)

以上のマユンガナシへの発話のうち、傍線部が、カンフツの文句の織り込まれた箇所である。「上の島、神の島から、富世、真世を打ち放り、播き放りして」とは、カンフツの前半で繰り返される表現で、マユンガナシが今日の日に、川平の人々の田地に果報を振りまきながらここに降りてきたということが、この発話で当主からマユンガナシに対しても、同じ表現によって述べられている。さらに、実った稲穂を描写する「南風が吹けば北の畦を枕にし、北風が吹けば南の畦を枕にし」、人間の身体が健康で強いさまをいう「アディフ木、コディ木のように」、牛馬が「狭い道に出ましたら数珠玉が弓なりに曲がるように」なるほどに増えるようにといった、カンフツの表現がそのまま引用されて、当主からマユンガナシに述べられる。当主としての神へのこのような発話は、「マユンガナシに立った人でないといけない」と言われるように、当主役にはマユンガナシの元成員が望ましいとされることを、筆者は既に指摘している〔澤井 二〇〇五、二〇〇七、二〇〇八など〕。

すなわちここには、マユンガナシの成員の「もの言わない」という神としての実践と、そうした神に対して、この儀礼の場に特有の言葉遣いで話しかける当主の実践の応酬がある。そこで当主が神に話しかける実践の背景には、かつての成員としての、ブリカタをたよりにしたカンフツの習得と実践がある。こ

のように、マユンガナシ儀礼の場では、神としてのマユンガナシの「もの言わない」実践と、元成員による、かつて習得したカンフツをめぐる発話の実践という、複数の実践の絡み合いを指摘することができる。

## 七 おわりに

本稿では、マユンガナシの成員達が儀礼に向けてカンフツを練習する場を検討し、カンフツを声として儀礼の場に現出させる責任をもつ成員によって、カンフツをめぐる習得のうえで留意される事柄―ブリカタのありようと、その習得方法を明らかにした。また、成員達が心がけるべきとされる、神としての声の規範―カンフツ以外には「もの言わない」こと―に着目し、そうした儀礼の実践が、マユンガナシを迎える側の人々による実践と絡み合いながら、儀礼の構成要素となっていることを提示した。

今日の文学発生論の流れにおいては、狩俣恵一により、カンフツを「神のことば」と見なす前提が問い直され、テキストの精確な分析のもと、琉球列島の地域的拡がりにおけるカンフツの位置付けが行なわれている〔狩俣 一九九九〕。また、八重山の仮面・仮装神と、それらの神々が「自ら語り、宣りあるいは謡う」歌謡の関係を検討した波照間永吉は、八重山において、沖縄や宮古に見られるような女性神役が自ら神として発する歌謡が少ないのに対し、仮面・仮装の神々と関わる歌謡が豊

富であると指摘する〔波照間 一九九八〕。これらの研究においては、琉球列島におけるカンフツ、また琉球列島における八重山の儀礼歌謡の位置付けが、着実な手続きで進められている。こうした研究への具体的な貢献を目的に、本稿で示した視点――一集落の一つの儀礼における個々のことばの実践実態、またそれらの絡み合いを捉える視点から、ことばの営みの地域的特質をさらに探っていきたい。

## 注

- (1) こうした文学発生論は、折口信夫の学説を背景とする。折口は一九二一年に沖縄を、一九二三年に八重山を訪れており、この探訪は、「国文学の発生」論の成立に影響を及ぼしたとされる〔長谷川 一九七七 二二二頁〕。国文学の発生には、たとえばその第三稿中の「遠所の精霊」〔折口信夫全集刊行会編 一九九五 二五〇頁〕などに、沖縄の事例が盛り込まれている。南島歌謡研究における文学発生論は、こうした、成立・内容ともに琉球列島の事例と深く関わる折口の学説を有力な基盤としながら展開された。
- (2) 喜舎場永珣〔一九七七〕、宮良賢貞〔一九七三〕、比嘉政夫〔一九八三〕など。
- (3) マウンガナシのムトゥを取ることは、「ムトゥシケー [mutu]ike」する」とも言われていた（二〇〇九年一月、一九二九年生の元成員に聞く）。
- (4) 二〇〇八年七月、一九三六年生の男性に聞く。
- (5) 二〇〇九年十月の調査中、若い世代の成員から、カンフツの習得を効率化する新しい試みについての提案があったことを確認している。二〇一〇年は、それまで五十年にわたり下の村のフームトゥをつとめた男性（一九三四年生）が、新しいフームトゥと交代するということもあり、今後、儀礼の存続と変化をめぐる動向について、調査を継続する必要がある。
- (6) 下の村のカンフツの各章の内容については、表を参照。表中の「章の名前」は、『川平村の歴史』〔川平村の歴史編纂委員会編一九七六〕中、一〇七―一二二頁・一二二―一三二頁から引用した。『川平村の歴史』においては、下の村の冒頭二つの章には章名が記されていないため、ここでは同様の内容をもつ上の村の章の名を、「（果報の年）」（田原）とカッコ内に記した。
- (7) 引用はいずれも、『川平村の歴史』の該当箇所を参照し、筆者が聞き取り調査に基づき一部表記を改めた。
- (8) 上の村では、どのムトゥに習ったかによって、節回しに異なる特徴が出る一方、下の村は二〇〇九年現在の成員全員が、二〇〇九年まで在任したフームトゥにカンフツを習ったため、ブリカタが統一されているという（二〇〇九年十月、一九三四年生の下の村のフームトゥに聞く）。
- (9) 「ツラス」に関連する単語を『石垣方言辞典』に探すと、

「チウラーシウン [tsira: sin] 「連れさす」の意。①並ぶ。

②並べる」(宮城 二〇〇三 五六六〜七)が見出せる。

(10) マウンガナシが発する「ンナー」の二番目の「ン」は、

両唇鼻音「ㄱ」あるいは軟口蓋鼻音「ㄴ」が帯気音化した

音声であり、聴覚的には日本語の「フ」と似ている。宮

良當壮はこれを、「ンナー」[ㄱ, ㄴ] (第二音節のㄴは有気

音を含む) (宮良 一九八一 三七二)と記している。

(11) 本節の以下と次節では、宮城「二〇〇三」に従った表記

法によって、発話の音節表記と対訳を掲げ、紙幅の都合上、

本節のみに国際音声字母による表記を付す。

#### 参考文献

折口信夫全集刊行会編『折口信夫全集Ⅰ』一九九五 中央公論社

川平村の歴史編纂委員会編『川平村の歴史』一九七六 川平公

民館

狩俣恵一『南島歌謡の研究』一九九九 瑞木書房

喜舎場永珣「川平村の「マヤヌ神」に関する覚書」『八重山民

俗誌上巻・民俗篇』一九七七 沖縄タイムス社 三九一〜

四四九頁

澤井真代「石垣島川平 マウンガナシのカンフツに関する一考察

―カンフツを聴く人の視点から―」『奄美沖縄民間文芸学』

第五号 二〇〇五 一七〜二七頁

同「儀礼の場における発話―石垣島川平の事例―」『奄美沖縄

民間文芸学』第七号 二〇〇七 四四〜五四頁

同「ゆるやかな共有―石垣島川平の来訪神儀礼における「神口」

―」『口承文芸研究』第三二号 二〇〇八 五八〜七一頁

谷川健一『南島文学発生論』一九九一 思潮社

長谷川政春「解説・折口信夫研究」折口信夫『古代研究Ⅴ』

一九七七 角川書店 二二九〜二七九頁

波照間永吉「沖縄八重山の仮面・仮装の神々―神の文芸を考え

るための序章―」沖縄県立芸術大学大学院芸術文化科学研究科

編『沖縄から芸術を考える』(芸術文化叢書Ⅰ) 一九九八

七〇〜八八頁

比嘉政夫「八重山川平の親族と祭団の構造」『沖縄の門中と村

落祭祀』一九八三 三一書房 二〇七〜二三四頁

外間守善『南島文学論』一九九五 角川書店

牧野清「椶海村「マヤヌ神事」覚え書―附・仲筋以東に於け

る村の興亡・御嶽の成立等について―」喜舎場永珣生誕百年

記念事業期成会『八重山文化論叢―喜舎場永珣生誕百年記念

論文集―』一九八七 五三〜八三頁

宮城信男『石垣方言辞典』二〇〇三 沖縄タイムス社

宮良賢貞「根来神々まゆん・がなしい」について」『現代のエ

スプリ』第七二号 一九七三 一八〇〜一九一頁

宮良當壮「まーゆんがなし」『宮良當壮全集 13』一九八一

三六六〜三八七頁 第一書房

(さわい・まよ／総合研究大学院大学博士後期課程)